

ポケット ジャーナル



★神戸室内合奏団が発足

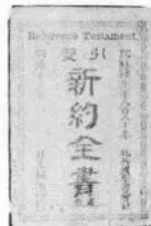
5月24日にコンサートを自治体が創設する初の室内合奏団として全国の注目を集めていた神戸室内合奏団がいよいよスタート。4月4日に市役所大会議室で宮崎市長らの激励をうけて結団式を行ない、5月24日に神戸文化ホールでデビューコンサートを開く。



神戸室内合奏団の結団式

音楽監督には岩瀬竜太郎京都市立芸大教授が就任しバイオリン9名、ピアノ3名、コントラバス1名、チェロ3名の若手奏者16名で構成。世界にはばたく合奏団へと期待される。

★「大聖書展」など聖書愛 読運動を兵庫県で開催



心の貧しき者は幸いかな

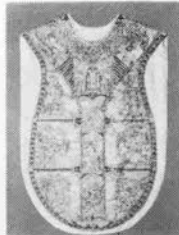
キリスト教界ではペンテコステの聖日（聖霊降臨の日）を中心に毎年、聖書愛読週間を設けて聖書の普及に勤めているが、この期間に一つの県を単位とした聖書愛読運動が各団体の共同で展開される。今年度は兵庫県で6月7日から24日まで行なわれるが、主な行事は、「大聖書展」（6月19日、24日、さくら神戸店）作家の曾野綾子氏による記念講演会（6月19日、神戸国際会館、佐古純一郎、高見沢潤一、山本七平氏らによる県内各地での巡回講演会、「聖書と生活」をテーマにした作品コンクールが

予定される。神を信ずる者も信じぬ者も、人類の叡知の結晶であるバイブルにもう一度ふれてみてはどうだろうか。

実行委員会事務局／神戸YMCA
078・241・7201

★西欧文明の源流にふれる 大ヴァチカン展

ヨハネ・パウロ二世が来日され、4日間の平和巡礼で多くの信者に感銘を与えたのはまだ記憶に新しい。西欧文明の源流をなすカトリシズムを生活実感としてとらえ理解してもらうことを目的に、大ヴァチカン展実行委員会（委員長・白柳誠一日本カトリック教会東京大司教）が全国6カ所で大ヴァチカン展」を計画、東京、広島に次いで、神戸さくらで3月15日～4月15日まで開催された。



ピオ11世の祭服

聖フランシスコ・ザビエルの遺骨、教皇冠、など歴代教皇使用の祭具、日用品など、門外不出の秘宝120点が展示され、世界で最初に、最後の催しと言われる

誕生日 ありがとう 運動

あなたも

ボランティアに!!

この誕生日ありがとう運動は、すべてがボランティアによって運営されています。

学生・勤労者・主婦・老人……など多くの人が、自主的に活動しています。

活動内容は、運動全般にわたります。①この啓発運動の企画・現在には講座や映画づくり、啓発図書の発行などをみんなで話し合っています。②全国各地の地域社会ボランティアとの連絡・月刊の「運動のしおり」の発送など。

③運動の事務局・毎日到着する現金古切手の受付とお礼のカードの発送。訪問者、電話の受付。

④古切手の分類・整理・はとんどが主婦で、平日の午後で月に四回目を決めてやったり、各家庭へ持ち帰ってやってもらっています。

⑤本運動発行の啓発紙や啓発図書の編集と発行・毎月発行している「運動のしおり」の編集など。

⑥ボランティアの研修・図書や映画などを教材に話し合いや施設見学会など。

⑦その他

ボランティア活動ですから、入退はまったく自由です。それぞれの人が、自分のやることを自分で決めてやっています。時間も、自分がやれる時間にやります。

みなさんも、この機会に本運動のボランティアとして、参加してください。

誕生日ありがとう運動本部
650神戸市中央区御幸通八十一一六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一八六一一内線三一六



絢爛豪華な宝物の他に、故

コルベ神父やマザー・テレサの愛の活動を紹介し、キリスト教思想の原点に触れるには絶好の機会であった

★厳肅な雰囲気

故加納宗七氏を讃える

神戸の港湾建設の先覚者といわれ、また、旧生田川の川床を整地して町づくりを完工し、今も「加納町」に名を残す加納宗七さん（明治20年没）の記念碑の除幕式が3月16日午後1時から同碑のあるフラワールードで行われた。



厳かな除幕式

実は同氏の銅像は、すでに昭和9年に旧生田川上流に建てられたのだが、太平洋戦争中の金属回収のため取り壊され、関係者の間で早くから再建の声が上がっていた。式は福田義文生田神社宮司らによって厳やかに進められた。除幕のあと、お神楽が舞われ、中井

一夫元神戸市長、加納竜一、花子、政雄各氏らによって玉串が奉典され、故人の偉業を偲んだ。

★子どもが躍動「一年一組せんせいあね」発行

神戸市立志里池小学校一年生の鹿島学級の日記ノート「あのね帳」に書かれた詩と自ら撮った写真で鹿島和夫さんが編集した詩とカメラの学級ドキュメント「一年一組せんせいあね」が理論社より発刊された。



「1年1組せんせいあね」

鹿島和夫さんは23年間の教師生活を通じて子どもの詩の実践教育に取り組み、すっぱんぼんの会、日本作文の会会員としても活躍している。著書に「たいようのおなら」（共著）がある。

□第一部、あのね帳より、第二部、対談（灰谷健次郎VS鹿島和夫）の構成、全228頁、定価940円。

★映画ファンよ集まろう！

「ザ・映画」結成

アマチュア映画愛好家たちで作っているグループ、「ザ・映画-KOBE」が広く一般映画ファンに会員

参加を呼びかけている。

このグループは'80年10月結成、現在会員数15名（男7名女8名）で、会長は服部光一さん。毎月第2、第4月曜日に喫茶店「サンモトマチ」で例会を開いている。会員の中に映画関係の仕事をしている人が多く、映画に関する情報なら何でもわかる、というのが特色で、一般より安く映画が見られ、招待などの特典もある。会費は月300円

□「ザ・映画-KOBE」連絡先
〒663西宮市青木町12-31水田文化2F
0798・23・1512 仁村まで

★新しい「芦屋の唄」募集中



石野 真子 今夏も8月2日、芦屋J.Cの主催で、新しい街、芦屋シーサイドタウンの広場で開かれる。この祭は、最近見直されてきたフリーマーケット、京阪神の大学を集めてのキャンパス・ミュージック・フェスティバルそして第三部は、石野真子を招いてのシウタム。

さらに祭りを盛り上げようと、芦屋の唄の歌詞を広く一般より公募。宝塚歌劇団による振りが付き、当日は石野真子が歌い全員で

美術ガイド



★県立近代美術館

中山王國文物展 5/12 16/31 28

近代洋画の名作展 5/7 15

★西宮大谷記念美術館

ポロニア国際絵本原画展 5/23 16

★KCCギャラリー

レタリングデザインモジロウ作品展 5/2 16

有閑人展 5/5 16 15 8

浜川卓己水彩展 5/23 15 29

グルンツェアディ洋画展 5/5 29

県写真作家協会公募展 5/30 16 5

★KCCアートギャラリー

越前焼陶芸展 5/5 11

第9回郷土作家による日本画色紙展 5/13 15 22

岡田親彦創作ガラス展 5/24 16 2

★がれりや馬垂乃

内山貞和彫金 5/22 15 26

★兵庫県陶芸館（全県会館5F）

小松益喜 古きよき神戸の異人館洋画特別展 4/1 15 31

★大丸神戸店美術画廊

大分伝統竹芸作陶展 5/26 19 12

有田白磁秀作展 5/5 5 12 14 7 15 12

京の中古道具市 5/5 15 15 15

★三越神戸店美術画廊

近代巨匠による陶芸展 4/28 15 10

現代ヨーロッパ絵画展 4/28 15 10

裸婦を描く油絵秀作展 5/21 15 24

★三越ギャラリー 八神戸ポर्टピアホテル1F

現代人気作家陶芸展 5/26 16 7

現代洋画小展 5/26 16 7

★神戸店美術画廊

京都の新興作家手塚末太郎展 5/26 16 7

木肌に刻むロクロ芸の粋、全国これし工芸作家展 5/8 15 13

林喜市郎油彩展 5/8 15 13

★4回ブライアン・ウイリアムズ水彩画展 5/22 15 27

踊る。青屋のイメージにびつたりの詞を作って下さい
締切日/5月末日
賞金/20万円(1編)

宛先/芦屋市茶屋町1-1 第1
グラウンビル2F G号 07971
32-0522 芦屋青年会議所事
務局

★「孫文と神戸」展開幕

国語や社会科の教科書で顔写真や作品を見たことのない人は、おそらくいないだろう。これほどポピュラーな孫文という現実を知る稀有な理想家について、まとまった展示や、紹介施設がなかったのが、不思議なくらいだが、現在神戸華僑歴史博物館(中央区海岸通、KCCビル・陳徳仁館長)



孫文胸像を扶んで陳徳仁(左)と陳根登さん

で開催されている「孫文と神戸」展では、孫文と由縁のある神戸人を中心に据え、約二百点にのぼる新資料を揃えて行届いた展示が9月末日までなされている。

三幅の書(孫文直筆)や、最後の訪日の際の神戸での写真、流布している年譜の誤りを修正した新年譜など孫文研究家には「宝の山」。

問合わせ/神戸華僑歴史博物館
07921277

花時計



赤尾兜子先生を悼む

赤尾兜子さんが主宰さ

れている俳句誌「渦」の20周年の記念パーティが大阪の大開苑で開かれた時、ふとあこれでこの

「渦」という雑誌はすぐれた後継者に恵まれ、完璧な体制ができたのだなと思った。

赤尾兜子さんは現代の代表的な前衛俳句作家であり、昭和36年に「現代俳句協会賞」を昭和53年には「神戸市文化賞」をそして、昭和55年に「兵庫県文化賞」を受賞されている。また、最近まで毎日新聞におられた。

そして「月刊神戸っ子」は新聞記者であり俳人でもあった赤尾さんに変貌お世話になった。

赤尾さんは味覚に對する感覚もすぐれ、玄人であった。神戸の味覚を訪ねる企画をお願いして数

★故郷ってなんだろう

失われつつある「ふるさと」を自分たちの手で作ろうと、姫路市細野に3年前に移住、4家族12名の大ファミリーで始めたのが岩谷ガーデン(もみの木山荘)だ。自然の懷に抱かれた6千坪の土地に田園の静けさがいっぱい。かもなべ、ぼたんなべや農場でとれた四季の山菜で接待してくれる。姫路駅から神姫バス細野行で40分、中国縦貫自動車福崎インターから車で20分の距離だ。宿泊は5500円(小人3500円)。

連絡先/姫路市豊富町神谷もみの木
079216415016

KOBE POST

★画家の品川裕二郎さんが、8年がかりの個展を「元町画廊」で3月25日/4月5日まで開催。文句なしの力作ぞろい。本誌6月号の神戸・画人でご紹介いたします。乞ひ期待。

★ディリススポーツ大阪本社編集局の電話番号が変更。06(46)1821(代) 〒550大阪市西区江戸堀1-18

★旭化成工業株式会社が、1981年度FITEセミナー神戸開催の一つを来る7月14日(火)神戸国際会議場で行う。「経営者とマネージャーのためのファッショ・コーディネート」・ミニ・リール・ベスキッド女史の講演。

★旭化成・大阪担当足立・伊福神戸新聞出版センターが、3月30日から移転。〒651神戸市中央区御幸通6-11-12三宮ビル東館4F 078(252) 0081

★日本漫画協会関西支部が5月2日より6日まで「笑トピア」漫画展を開く。高橋孟、田中晋一、北星晃一さんら関西漫画界のオールスター出演で、原画展、漫画教室、四柱推命による東佑三さんの似顔絵占いなどの展示と実演。会場はさんか広場。

★青空俳句会主宰伊丹三樹彦さん(現代俳句)と名筆研究会主宰村上翔雲さん(現代書)は、それぞれ4月開講の千里中央より文化センターの講師に就任。

★株式会社ミカド(仏蘭西屋・英園屋・菊梅屋等)が、事務所を4月より移転。新住所は〒651神戸市中央区八幡通4-11-16豊島第二ビル 078(291) 8376

★神戸日建のデザイナー・井ノ内一夫さんが3月31日長女・紗ちゃん誕生/おめでとう。

★シンガソングライター・電通勤務の新井満さんが4月1日付で東京本社ビデオディレクターに栄転。神戸の名物男がまた一人消えて残念だが、頑張ってます。

●月刊神戸っ子20周年記念出版

ALPHABET AVENUE



新井 満

〈文〉



石阪春生

〈コラージュ〉



二人の邂逅が火花を散らす

KOBEの摩訶不思議な幻想空間

〈アルファベットアベニュー〉

26色の道標。

●愛蔵本

26.3cm (ヨコ) × 25.7cm (タテ) 型

〈60頁ダブルトーン・コラージュ25枚入〉

¥ 5,000 (送料 ¥ 300)

協力 / 月刊神戸っ子 編集人 / 小泉美喜子

発行人 / 小泉康夫

発行所 / コミュニティサービス株式会社

神戸市中央区東町113の1 大神ビル7F

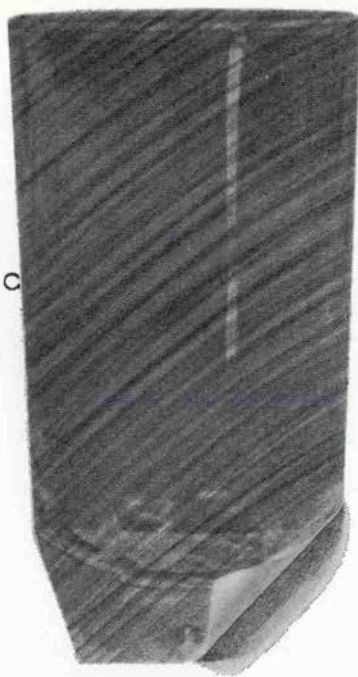
☎ (078) 331-2246 月刊神戸っ子内

□才5回神戸女流文学賞受賞作品(原題「痕跡」)

流れる素描

久保田 匡子

絵／田中一好



△5▽

ふっとため息をついて肩を落とした弘子の、疲れをに
じませた苦し気な表情に、範子は、技巧を払い落とした
素顔を覗き見た思だった。

そう言われて見れば、布団の敷き方にも弘子の並大抵
ではない気の配りが現われている。布団は畳の縁に沿っ
て狂いない正確さでもって敷かれ、ピンと張ったシー
ツの隅も切りとったように角が立っている。磨かれてグ

ラスのように輝いている水差しは、寝そべった人の手が具合よく届く位置にある。

「そんなにじろじろ見ないでよ。恥ずかしくなるじゃないのよ。でもどう？きちんとしたものでしょう。人間って本質は変わらないもののねえ。そら、あの寮時代に、あなたと二人してせっせと掃除して回ったわねえ。まるで邪なものを箒で掃き出しているように脇目もふらずに、さア……それとも空襲の恐怖から逃れるためだったのかしら……覚えている？」

「そうそう、そんなことがあったわね……大方あなたに引きずられた形だったけど……」

白い頭巾、白い上下の作業衣は工場に来てから各自が手縫いで縫ったものだった。その略式着物のような不恰好なモンベ姿に、ブカブカの地下足袋姿の弘子が、丈の長い竹箒で一心不乱に堤の下の工道を掃いている姿が浮かびあがる。工場と山奥の寮の間の往復だけで陽に焼けて、ただでも浅黒い弘子の顔は汗と油で黒く光っているが頬は赤い。弘子の頬はなぜそんなにはつきりと丸く赤いのだろうか、と入学して間もなく、絵本でしか見たことのない赤い頬をした女の子に、範子は興味を抱いた。「血液の循環が悪いということなの。健康だからじゃないの、むしろ反対なのよ。悪い血が固まっているのよ。」

だから手もほら！急速に親しくなったある日、元氣そうだと感嘆した範子にあっさりと答えて、弘子は左右の手を前にのばして見せた。まだ幼い形を残している指から甲にかけての皮膚は、頬よりも赤黒くて、ところどころ割れて冬のひどい凍傷の跡をとどめていた。家では水仕事も一人前にやるのよ、と淡々と語る弘子に範子の傾倒は一層深まっていった……あの頃の弘子は十二歳とは思えない沈着なませた少女だった。それは前年に母を亡くして、小学生の二人の弟の世話までしているけなげな生活からくるものだとするには、夏休みを待たねばならなかった……。

蒼白いような化粧でわからないが、きつと弘子の頬は

今でも赤いのだろう……と、自分の家を尋ねてきた時と違い、お白粉を塗っていない首や胸元の浅黒い皮膚が目をとめた範子は、初めて昔の友を身近く懐かしんでいた。「……あなたもわたしも相当な模範生だったわねえ。」

今思えば可愛いものね。あなたって一人だけ皆勤で賞金までもらったでしょ。先生の悪口ばかりも言えないわね。あんなに頑張っちゃって、後になって何もかも空しくなるの無理はない。でも馬鹿みたいよ。癖というべきかしら、本性たがえずというのかしら、あなたも相変わらずだってね、ご主人が言ってたわよ。律義で、堅物の見本そのものだって。それに大変な掃除マニヤって……」

動員時代のおのが姿を思い出して苦笑していた範子は悪戯っぽくも、真摯ともとれる弘子の大きな目をまじまじと見つめ直した。

「あら、何度も来て下さっていたのにお礼言うの忘れていたわ。いいご主人じゃないの。純情で……あの方たらねえ、酔ったら戦地の話ばかりなさるのよ。あなたの友だちには戦争以外の話はしてはいけないと決心なさっていらっしゃるみたい。でも、わたしは夜毎の猥談に食傷してるでしょ。それに軍隊にはいった兄も主人もいないもんだから夢中で聞いちゃうの。動員時代を思い出したいねえ」

「厭な人ね、お酒を飲んでまでそんな話をするなんて」夫の不始末の繕いをする妻の態度は取りたくなかったが、範子はつい險しい口調になった。

「いいじゃないの。お酒を飲べばこそよ。それでうさを晴らしてられるのよ。ほんとに、兵隊さんの恨みつらみは深いわね。わたし、よくわかるわ。火薬工場で将校や下士官って結構なご身分だったこと知っていたけど、実際の軍隊ではもっと権力的だったのね。ひどい話をうんと聞いて、わたしすっかり将校嫌いになったわ。断然いやね、あんなの……ご主人の恨みが乗り移ったみたい……女の子たちにも良い薬になってんのよ。あの世代ってテレビなんかの戦争ものを見て、恰好いいって言った

りするのよ。それで二人とも驚いてるわ。家ではなさらないの？そんな話……」

「聞き手が二十年來の古女房だもの、新鮮味がないのでしょ」

登はときおり軍隊の話はする。結婚以来ずっと続けてきた習慣のようにして。けれども近頃、彼の話をどれだけ本気で聞き取っているだろうか、範子はふとたじろいだ。

「そうかもね。おとといはね、おかしいったら。わたしもへべれけになって意気投合してたら、ご主人とうとう泣き出しちゃった。強行軍で置き去りにしなくちゃならなかった戦友のことだったの……純情ねえ、感激したわよ」

弘子が手放して登をほめるのにつれて範子は次第にいらいらとしてきた。馬鹿げていると思った。登のやっていることは、戦友会の集まりにあれこれ難癖をつけたがら、結局は出掛けて行くよりももっと愚かな行為ではないか。

彼女は登が弘子のもとに再三来ているのに、一言も触れずに隠していることに抑えきれぬ不快を感じていた。

そうして一方で、この前二人が話題を探すにも事欠いて、自分の火傷の跡を持ち出していたのを思い出して、やり切れなく、はじめな気持ちに落ち込んでいった。弘子はうわべはほめているが、内心では酒場に来て軍隊時代の話しか出来ない登を嗤っているのではなからうか。弘子はまた、独り者の皮肉な目で、そんな腑甲斐のない夫に縛られて生きている友をも嗤うことが出来るのだ。

「ママさーん。お電話！」

階下から歌うように女の子が呼んだ。

「ちよっと失礼ね」

と弘子は、くねくねと体をくねらせて範子の横をすり抜けて行った。ツーンと刺激のある香水の匂いが鼻をついた。匂いは部屋の中空に静止したまま容易に散っていかなかった。

主のいない部屋で、範子は赤い寝具と対決するようにして坐っていた。もし支配人というのが弘子の愛人だと仮定しても、ここに感じられるのは愛の秘めやかさよりも献身的な忠誠心だった。常に布団を延べておかなければならないということにも、弘子の厳しい生き様が示されているのではなからうか。

範子は真紅の布団に横たわる一人の男を、暗い暴力的な背景で捉え、弘子のあれからの二十六年をそこに重ね合わせた。

△現実を直視しない感情はしよせん遊びに過ぎない▽
という弘子の言葉を覚えていた。少女のたわいない思いつきの言葉ではない。明日をも知れない生活の中で必死な思いで生きなければならなかった人間の言葉だった。

確かに弘子は変わった。しかし、これが弘子の現実であるとすれば自分は信じなければならぬ……弘子を信じるのか、現実を信じるのか、そこに違いがあるのか、またないのか。範子はしだいに薄霧に包まれるような模糊とした思いに陥ってしまった。

「困ったわア、支配人が来るのよ。もっと遅くなるはずだったのに……」

いつの間に来たのか、あがりがまの所に姿を見せた弘子は、柱に寄りかかって立ったまま言った。

「あなたと今日はゆっくり話し合いたかったのに……」

「いいのよ、また会えるわ、いつでも……」

範子はあわてて、今さっき脱いだばかりのコートを着て立ちあがった。そのあわただしい動きを制止するように、

「あの時ね……」

と、しんとした空気に近い弘子の声だった。

「……あの時。敗戦の日よ。やけどをしたあなたに悪いからあまり言わなかったけれどね。とっても嬉しかったのよ。これから本当の人生が始まるんだって……何もかも厭になるっていうのと矛盾はしないわよ、あの日の例えようもない自由な気持ちというものは……」

弘子はむきあった範子から目を逸らせて言っている。昔、大切な心の内をあかす時、誰をも見ていない様子で、己にさとすが如く語りかけた癖はそのままだ、と範子は引き入れられるように聞いていた。

「こんなこと言って現在のわたしを悔やんでいるのじゃないのよ。わたしは自分に満足しているわ。自分を一



番大切にしてきたつもりだよ。でもね……つらい時もあるのよ」

それはそうでしょう、とおざなりではない同情を籠めて頷いた範子をはぐらかすように、

「いえね、あなたを追いたてるみたいでつらいのよ」

と、がらりと調子を変えて弘子は、崩して着付けた衿前に右手を差し入れて、思わせぶりに呟いた……

階上でバターンと扉が激しい音を立てた。また登の鬱屈が始まったと範子はうんざりするが、じっと坐っていられず豌豆をむいていた手を止めて腰をあげた。原因はすぐには思い当たらない。彼女は最近登に対して何をどのように言えはよいか自信を失なっていた。この前機嫌がよかったからといって、同じ内容の話をして無事にすむとは限らない。今取りかかっている空調器の設計図がうまく引けず、きりあげて昼過ぎから家に帰っていたのだが、さして苦にしている様子ではなかった。復員して以来、転々と移った後にやっと落ち着いた小さな会社だったが、設計図を引く技術も曲がりなりにマスターしていて、今では一番の古顔でかなり勝手な行動も許されている。人付き合いも悪くなく、会社ではむしろ好人物と見られているらしい登の、家庭の中で見せる険しい素顔である。

範子は過ぎ去った事象のあれこれの中から、登の憤りを触発したものの正体を、息をつめるような緊張をもつてとらえていた。お茶を入れて休んでいた時のこと、姉が庭の手入れをしていた。十坪あまりの狭い裏庭には蘭や青木、椿、五月などの常緑樹が、お互いの瘦せた枝々や色褪せた硬い葉先を心許なげにさし交わしている。冬場は一筋の陽光も落ちず、水はけも悪い土壌は常はじめめとしてところどころに苔も生えている。華奢な草花は育たなかった。

「寒肥料には遅いのだけど……」

姉はガラス越しに眩しそうに目を細めて笑いかけ、背

丈よりも大きいのがびた青木の根元にしやがみ込んだ。

「姉さんが手入れしてくれてるからいいようなものの、わたしたちだけだったら目も当てられないわね」

庭など持っても雑草が生えるにまかせただけだろうと、日頃から語り合っている素地があったので範子はよくは考えずに言った。

「自分の庭だからご随意さ。いつでも手入れぐらいいは誰にも気兼ねなくやれるさ」

「でも働かないで眺められるのは楽しいの」

「眺めるほどの庭ですかい」

「それでもないよりはましだわ。もし、これっぽっちの緑でもなかったら、それこそこんな所に住んでいられないと思うわ」

姉に聞こえぬように範子は低い声でたしなめながら、またしても会話がある一定の方向に傾いていくのを絶望的な気持ちで感じていた。必要でもない話しかけを止めない習性への罰だろうか。

「渴すれど盗泉の水を飲まず、さ。知っているかい、この言葉を」

「そんな……じゃどうすればいいの。この家を捨ててマンションにでも移りますか？」

「ひとごとみたいに言うんだな。うちにマンションを買うだけの余裕がないのを知っていて、くそ落ち着いてやる」

その時の登は薄く笑っていて、範子には苦笑しているとは映らなかった。

自分たちは、この家を出ることを真剣に考えねばならぬ時期にきているのではないか。賃貸でもどこかのアパートに引越して、姉との日常から離れてしまわねば、登の鬱屈はますますひどくなるのではなからうか。

けれども姉を淋しい境涯に置き去りにするだけの見返りが、確実にもたらせられるとは考えられない。それにもましてこの家を出ることは、登に従って当てどもない彷徨に踏み出すことだという恐れに似た不安に憑かれて

しまう。

あの時のことを範子はまざまざと思い出す――

登はそれまで熱心にしていた製図の練習を急に止めたかと思うと、筆筒からオーバーを出してもぞと袖を通し始めた。

「どこへ行くの？」

そばで編物をしていた手を休めて範子は尋ねた。来月に迫った二番目の出産への準備だった。

「うん、ちょっと、そこまで……」

煙草でも買いに行くのだろうと範子は気にもとめなかった。二時間あまり彼女は平静に待っていた。足をのばして繁華街の本屋へでも行っているのだろうと思った。

やがてバラバラと雨が屋根のトタンを叩き始めた。夜だった。傘を持たない登をどこへ迎えに行けばよいかと思索している範子の前に、寒さにそそけた顔をした登が帰って来た。頭髮は濡れそぼって額に巻毛のようになって貼りついてる。

「なアに、自動車道の中央でずっと立っていたのさ。車が運よく隣いてくれないかと思ったのだ。それなのにどの車も避けて走り去ってしまう。うまく行かんんだ」冗談ではなかった。努めて平然としている登の、雨滴が細かく光るオーバーの袖口や、寒そうに立てた衿元から冷気が危機そのもののごとく立ちのぼってくるのを範子は慄然として感じ取っていた。

喧嘩をした後でもなく（その頃、範子は登と争った記憶はない）まして二人目の子供を持つとうとしている矢先の、登のこの夜の行動は不可解という他はなかった。

範子はめまいのように襲ってくるショックを必死に抑え込んだ。鈍く、重い痛みをとまなつて体の内側から呼びかけるように蹴り続ける子供を、この理不尽な攻撃で些かでも傷つけてはならなかった。

□第六回

神戸文学賞 神戸女流文学賞 作品募集

小誌は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

- ・第一回神戸文学賞「鳥之内ブルース」(田原新「尼崎市」同女流文学賞「ベットの背景」(小倉弘子「大阪府」)
- ・第二回神戸文学賞「姥捨て」(奥野忠昭「大阪府柏原市」「生活」(吉峰正人「神戸市」この回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞)
- ・第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」(蒼竜「奈良市」同女流文学賞「夢の消滅」(矢原由紀子「高知市」)
- ・第四回神戸文学賞「溶ける闇」(高木敏克「神戸市」同女流文学賞「影と棲む」(田口佳子「伊丹市」)
- ・第五回神戸文学賞「該当なし、同女流文学賞「痕跡」(久保田匡子「大阪府」)

ここに第六回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

〈募集要項〉

- 一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で応募作品は一篇に限ります。
- 一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限りません。
- 一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。
- 一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題(創作主旨)をつけて下さい。
- 一、締切りは八月二五日(当日消印有効)

☆なお、選考は小誌ならびに小誌が依頼した選考委員によって行います。

- 一、入選発表は本誌昭和五十七年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。
- 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
- 一、入選作品の著作権は本誌に属します。
- 一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。
- 一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一三の一大神ビル七階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。

電話〇七八―三三一―二二四六

主催／月刊神戸っ子



受胎

吉本 惇見

え／小西 保文



デナはその後、何人のローマ兵と交わったことであろう。彼等のほとんどはこのテベリヤの町に駐屯するローマ本国の部隊員であり、さもなくばこの湖の周辺の町や村の駐留地から保養にやってきた兵隊たちであった。そしてある者は「かわいい牝ロバ」の譬どおり、ひどく丁重に彼女を扱い、ある者は恐ろしく乱暴に彼女に対した。しかしデナの前を通りすぎていった男たちに唯ひとつ共通していたことは、彼女の部屋に入るや、彼等が直ちにドアの外で恭しく着用していた一切の地位や衣服を投げ捨てすべてが獣であったことである。男たちはすべて好色であった。「かわいい牝ロバのいる館」では肉体とそれを贖う金銭のみが唯一の尺度だった。

こうして、デナは男の性の姿を実感した。それは彼女が

父や兄とともに過したベタニヤ村の生活からは決して想像もできなかった人間の冷厳な事実であった。彼女の隣室にいるエミマは仕事が終わったとき決まってローマの小粋な杯を片手にデナの部屋を訪れ、力なくベッドに横たわっている彼女を口ぐせのように慰めたものである。「愛情なしでいっちゃまいな」

そういつてローマの杯になみなみとついだ蜜入り葡萄酒をデナに差し出し、時には大仰に膝をボンと叩いたものだ。

「おお、ぶどう酒よ、おお、この地上の喜びよ！」すでに酔いが全身を快く支配しているのか、エミマはベッドの上で足をひろげ詩篇の一節を大声で唱えては笑い転げた。

「おお、オリブよ、おおナルドよ、お前たち、その顔を
つややかにする香油よ！ このエミマさまも、からつき
しのお馬鹿さんじゃないんだよねえ。いまじゃローマの
牡馬どもに、こちらだって結構楽しませてもらっている
のさ」

過越祭で賑わう聖都の雑踏をあてどなく徘徊し、デナ
がふたたびアントニヤ城に通じる狭い石畳の道にさしか
かった時だった。飾り毛のついたローマ兵の胃が、デナ
の眼をつよく射った。だが、なにより彼女に不吉な予感
を喚起させたのは、そのローマ兵を取り巻く群衆の姿だ
った。ある者は両手で顔を覆い、ある者は拳を振りたて
奇声を張りあげている。獲物をとらえた狩猟者のように
得意顔の男もいれば、無表情に剝けた石壁にへばりつい
ている女もいる。群衆の視線が多様であればある程その
ものが不吉であることを、デナは父の事件以来、本能
的に悟っていた。

彼女の横を走り抜ける二人の男の叫ぶような会話が蠟
燭の炎のような形をした石柱に反響し、彼女をげしく
捕えた。

「いよいよ、磔刑がはじまるぞ！」

「囚人は誰だ？」

「あのラビと、二人の強盗どもだ！」

「ひょおっ、あのラビって、イエスとかいう野郎のこと
か？」

「神の子を自称する野郎の死にざまが見ものだ！」

陰気な僧服に身を包み一目でそれとわかる祭司の男と
外衣の裾に豪華な刺繍を施した小肥りの男とが無器用に
デナの横を走り抜けた。彼女は反射的に、二人の男の後
を追った。後を追いつながら今朝はやく、まだ夜の明けき
らぬ闇の中で、トマスが短剣をとり喘ぎながら口にした
忌まわしい言葉がそのまま眼前の事実となつて群衆の眼
に晒されていることへの覚悟を定めた。

真昼に向かう白い陽光が行列の先頭を歩む泣き女たち

の空音と混ざり合い、人々の皮膚を鈍く照らす。停滞し
て進まぬ行列と、狭い窮屈な石畳に苛立ちながらローマ
兵のまたがった馬が上下に激しく首を振る。さまざまな
群衆の熱気と赤ん坊の泣き声とに挟まれ、あのラビが両
手をつき、死に赴く家畜のように石畳の上に跪いている。
そのあわれな生き物の胸の筋肉が頻に波打つ。血の滲ん
だ上衣の上に、鉄片を細工したローマ兵の鞭が容赦なく
はねあがる。ラビの背中が、そのたびにまるく曲がる。

「もっと打て！」

「打って打って打ち殺せ！」

視覚が喚起する興奮に、あらゆる顔が酔っている。階
層をこえ年齢をこえて、顔という顔が熱い好奇に踊って
いる。

「ひょおっ、ユダヤ人の王様！」

「神の子なら、お前さん自身を救え！」

ついまいしがた神殿で姿なき神にぬかずいたにちがい
ないその同じ眼が、今は自称「神の子」を嘲っている。
神殿に在す彼等の神は全能であり、彼等にはその逞しい
神がこれほどに貧弱な男を生み落すなどとは考えるのも
汚らわしい。神は厳然として至聖所に座し、その神によ
って使わされる救い主は、きつといつか虹の上に、天使
と天の軍団とを従えて彼等の栄光を現わすに違いない。

「立て」

鞭を手にしたローマ兵が顎をしやくりあげた。忠実に
その命令に従おうと、血の滲んだラビの手が十字架の横
木を掴んだ。

瘦せ細り黒ずんだ手が必死に力をふりしぼり、背丈よ
りはやや長いその横木を担おうとする。

「ひょおっ、いいぞ、ユダヤ人の王様！」

「お前さんの家来どもは、どうした！」

「王様の家来にも、かつがせろ！」

糸杉の柱を猫背の上に乗せ、ラビはやつと立ちあがっ
た。彼は俯いたまま横木を引き摺り、両手で柱をもった
まま左右によろめいては少しずつ前に進んだ。

不揃いな石畳の一枚一枚を確かめるように糸杉の柱が鈍く不規則な音を刻みこみ群衆の好奇に呼応する。ラビのすぐ後につづく二人の盗人たちにはまだローマ兵の命令に聞き従う余力があり、彼等は柱を引き摺ることなく肩にしっかりとになっている。いま群衆の注意はただラビの上に注がれ、その傷ついた家畜の姿だけが人々の熱狂を喚起する。

「王様！」

デナの横で顔を剃り髭のない男が女のような声音で囁きながら言った。

「冠がすてき！」

さきほどまでローマ兵の手になっていた茨の輪が、肩にまで垂れたあのラビの髪の毛の上にいつのまにかのせられていた。デナはラビのもとに近づきたかった。小突かれ押しもどされながら、群衆の只中を必死に突き進んだ。やがてラビの横顔がローマ兵の肩越しに間近に見えた時、デナは一瞬、体の中心を凄じい絶望感が閃光となって駆け抜けるのを知覚した。涙が頬に溢れた。あまりに急激な内心の葛藤に、デナはどう対処してよいかわからなかった。瘦せこけた頬、紫色に腫れあがった鞭のあと、血痕のために小さく固着した肩の上の髪の毛、糸杉の柱にからまるほそい枯枝のような二本の腕、こめかみといわず鼻すじといわずところかまわず皮膚のうえを伝い流れる血液と汗、落ち窪んだ眼孔、折れ曲がった体軀、群衆のどよめきと静寂、武装したローマやシリヤの兵士たち、小鳥のように怯えた子供たちの視線。それらの一つ一つをどのように結びつけばよいのであろう。いや、それらの一つ一つが、何故いまここにあるのであろう。

つい二日前、ラビはベタニヤで静かだった。その頬は丸みをおび、艶やかだった。ナルドの香りを漂わせたそのふくよかな髪は、貧しい素焼きランブのもとでさえ白く美しく光っていた。なのに、ラビはいま血と汗とを滴らせながらあらゆる光を失い、力なく歩む。これら二つの光景を、どのように結びあわせればよいのであろう。そ

してあの夜、ベタニヤの村でラビを取り囲んでいた険しい眼つきの弟子の人たちはどうしたのであろう。あのトマスやタダイたちと同じように、彼等もまた一人残らずこの聖都から逃亡したのであろうか。ラビはいま二人の囚人とともに、糸杉の柱を引き摺り、聖都の石畳を黙々と歩みつつける。

血と汗の雫が一層はげしく鼻筋や首筋を伝わり流れた。彼に寄せられている同情の眼は皆無だ。母親に手をとられ、石を投げつけられた小鳥のように怯えていた子供達でさえ、もう瘖高い声で彼を誘う。

「ユダヤの王様！」

顔を剃り髭のないさきほどの男がデナの背後で女のような声色で叫びつつける。

「奇蹟は起きないの、神の王子様！」

鈍い音がした。デナは必死にこらえた。たとえそれがどのように悲惨な光景であれ、男の領域に、女が手出ししてはならないのだ。四年前、父シモンが荒野に連れ去られたのも、神とこの父系社会との間に取りかわされた厳然たる契約によるものではなかったか。しかも神との地上との契約は、つねに預言者によってのみ語り伝えられてきたのだ。

ラビの担っていた横木が石畳の上に転がり落ち、ラビは両手をついてうずくまった。とっさに、ローマ兵の鞭がとぶ。鞭を受けるたびにラビの背中が鮮血をにじませ、まろく曲がる。

もはやラビは死にゆく家畜のように両手を石畳についたまま、胸の筋肉を不規則に痙攣させている。

「もっと打て！」

「打って打って打ち殺せ！」

興奮に酔いしれた顔が狂ったように叫びつつける。

「鞭をやめろ！」

胸あてに獅子の彫りものをつけたローマ兵がデナの眼前で、鞭をもつローマ兵をどなりつけた。胸あての彫刻からデナには、いま命令を下した男が百卒長であること

がすぐにわかった。

「水をやれ」

テペリヤでも、ローマの百卒長はなぜか優しかった。

十字架に手をかけていたシリヤの奴隸兵が、あわてて自分の腰につけていた皮袋の栓を抜き、ラビの口元にあてがう。そのラビの鼻筋を、汗とも血とも水ともいえない液体がしたたり落ちる。



「あれで、しゃれこうべの丘にまでゆけるのかしら？」
見知らぬ女がデナの横で、彼女に話しかけるように呟いた。

ラビは首を静かに横に振り、ゆっくりと百卒長を見あげた。血と埃とが醜く付着した顔の中で、その瞳だけがまだあのガララヤの湖のように青く深く澄んでいた。堰をきったように、デナの眼に涙がとめどなく溢れた。

「かわいい牝ロボのいる館」の禁を破り、デナがローマ兵の子を生み落したのは、彼女がテペリヤを去るおよそ一月前のことである。「館」ではいかなる懷妊も放置してはならず、墮胎するためのさまざまな方法を講じねばならぬことが鉄則であった。しかし彼女は自己の受胎をはっきりと自覚した日、故郷ベタニヤの情景とそこに佇む父シモンの面影がまるで白日夢のように鮮やかに彼女に向かって押し寄せてくるのを感じた。

時に貧しい夕餉をとりながら、時に秋の澄んだ日射しを受けてオリブ油搾りの石臼を牽きながら、父シモンは口ぐせのように娘に語った。

「デナよ、女と百姓が、生命をはぐくむ。ただ神の光を畏れておくれ」

時にはパンを裂き、時には両手いっぱいオリブの実を抄いあげて、父はそれを祝福した。しかし父シモンといえども、娘のこの胎の実だけではどうして祝福することができよう。穢れた女の穢れた胎の実には麦の穂にまじる毒麦のように、まだ穂の出ぬうちに煉獄の炎に焼きはられるがよい。

しかしデナは隣室のエミマにその懷妊を悟られたとき、たとえ自己の宿す実が毒の実であろうとも、その胎の実を守り育むことへの執着が日毎につよく彼女の内に湧き起こってきたのをいかんともしがたかった。

「そんな芽は、はやく摘みとった方がいいよ。少しく

らい小銭をためたからってさ、あんた丸裸になって、これからどうやって生きてくというんだい？」

エミマは熱心にデナを庇った。

「それにさ、はじめは少しつらいけどさ、なあに二度目からはもうへっちゃらになるもんだよ。それもこれも、かわいい牝ロバの宿命というもんさ」

デナはしずかにかぶりを振った。

「わたしたち、もう決めたの。ありがとう、エミマさん」
その覚悟した口調に、エミマはかたく貝のように口を噤むほかなかった。

「わたしたち、長く生きてはゆけないかもしれない」

ふたつの眼を大きく見開き、エミマは呆然とデナを見詰めつづけた。

たしかに「館」を追放されることは、直ちに死を意味するに違いない。それでも、デナは生みたかった。はじめての胎の実を、どうしても育てたかった。たとえそれがローマ兵の子であれ、シリヤやフェニキヤの奴隸兵の子であれ、デナは生涯に唯一度、生命の讃歌を奏でたかった。いや、母の死以来、何と多くの不幸が彼女の傍を通りすぎていったことだろう。それら一切の不幸とここにきてようやく獲得した現在の生活にかえて、いま胎に宿る小さな生命を守り育てることは、彼女のこの現実に対する最後のささやかな抵抗であるにちがひなかった。

「女と百姓が、生命をはぐくむ」と父は語った。たとえ束の間であれ、生命への讃歌をたからかにうたいあげかみしめること、一人の女の過去の傷痕をつぐなうに足るこれ以上勝利ある出来事がどうして他にありえよう。

エミマは彼女のために、堕胎に関する一切の面倒は自分がみると「館」の主にかけてくれた。

「もし堕胎が成功すれば」

「館」の主は腕を組みエミマを見てにやりと笑った。

「規定どおり、デナには十日間の休暇を与える。それに
お前にもだ、エミマ、特別にな」

「館」の主にかけあった日の夜、エミマはいつものよう

にローマの杯を片手にデナの部屋を訪れ、デナの下腹部をボンと敲いた。

「あんた、乾杯だよ。乾杯！ あとはさ、その子の元気な産声をきくにいい場所を、はやく見つけておくことだよ」

エミマは蜜入り葡萄酒の杯をデナに手渡し、ベッドの上にとっと大の字になって転がりこんだ。

「今日の牡馬ときたらさ、あんた、あたしのしもの血が栄えあるローマ帝国の胃を汚したって、それはもうひどく悪態をつきやがってさ。ふん、なによつ、あたしやね、ローマの千卒長ユリアスさまにじきじきいいつけてやると脅かしてやったのさ。そしたら、あんた、その牡馬ときちや、胃のかざり毛についていたあたしの神聖なしもの血をあわててペロペロとなめはじめたんだよ。かりそめにも、世界に君臨するローマ帝国の兵士がさ」

テベリヤの湖畔に近いとある粗末な貸家でデナが見事な男児を生み落したのはその数か月後であった。みどり児は、まだ春にはやいアダルのはじめ、一人の年老いた産婆だけにつきそわれて男らしい産声をあげた。赤ん坊は産着にくるまればしたが、家族の祝福やユダヤの習慣にもとづく嫡出子の認知を受けることもなく、唯母親の熱い眼差しだけを注がれたのである。

母はその日、終日、生命の讃歌を奏でつづけた。幾筋もの涙が零れ落ちた。これからさきの生涯に、これ以上の飲びが訪れ来ることはもうないであろう。新しい命を、今日、私は生んだ。むろんそれは、長い過去の不幸を埋め合わせるには余りにささやかな飲びであるかもしれない。しかし人生における幸福も不幸も、おそらくはこのように何げなく一人の人間の横をつぎつぎと通り去っていくのだ。

彼女は昔見た玩具のように、母の横でやすらかに眠り入る小さな生命をじっと見守りながら、これからの人生への覚悟をはっきりと思い定めた。

(つづく)

★神戸っ子トラベルコーナー

★ヨーロッパのベストシーズンに訪れるスペシャルヨーロッパ

1、ジュネーブ・パリ8日間
出発日/6月9、16日、7月14日

2、ウィーン・パリ8日間
出発日/6月4、18日、7月9日

3、マドリッド・パリ8日間
出発日/6月13、20、27日、7月4、18日

4、ミュンヘン・パリ8日間
出発日/6月9、16日、7月14日

5、アテネ・パリ8日間
出発日/6月13、20、27日、7月4、18日

6、ローマ・パリ8日間
出発日/6月4、18日、7月9日

費用/いずれのコースも
¥298,000

お問合せ・お申込みは近畿日本ツーリスト神戸海外旅行営業所
0391-2401

★ライン川遊覧と古都ブルージュ
お問合せ・お申込みは近畿日本ツーリスト神戸海外旅行営業所
0391-2401

パリ10日間(大丸特別企画)
日程/第1便6月18日/27日
第2便7月2日/11日

費用/¥398,000



ライン川畔風景

コース/大阪・フランクフルト・ライン川遊覧・ハイデルベルグ・ルクセンブルグ・ベルギーのシャトーホテル(泊)・ブルージュ・パリ・大阪
オプショナルツアー/ロアール河畔の古城めぐり¥24,000
(フランス料理込み)

お問合せ・お申込みは大丸トラベルサロン(大丸神戸店6階)

※331-8121担当/大畑

★ニューヨーク12日間
出発日/6月4、11、18、25日

費用/¥258,000

コース/大阪・ソウル・アンカレ・ソウル・ニューヨーク・ソウル・大阪(ニューヨーク5泊)

オプショナルツアー/ブロードウェイ・ミュージカル、ナイアガラ瀑布1日観光、ワシントン1日観光、ボストン観光。

お問合せ・お申込みは日本旅行三宮営業所 241-1881

★ロマンあふれる南海のパラダイス、タヒチ8日間
費用/¥378,000

★キャンベラ・ハワイ4泊6日
費用/¥169,000

★WORKING HOLIDAY IN AUSTRALIA
あなただけのオーストラリアで働きたいから長期滞在をしませんか/30歳

★5月の国鉄会員旅行
1、やすらぎの日光と上州の旅・2泊3日

出発日/5月15・29日、6月12日
コース/新大阪・東京・足利・足尾銅山・鬼怒川温泉・東京・日光・中禅寺湖・上野温泉(泊)・高崎・東京・新大阪
費用/おとな・¥54,800
子ども・¥40,000

2、志賀華津原ルートと伊香保温泉・2泊3日
出発日/5月22日、6月5、19日
コース/新大阪・長野・志賀高原・白根火山・草津温泉(泊)・鬼押出し・横名湖・伊香保温泉(泊)・横名神社・東京・新大阪
費用/おとな・¥54,800
子ども・¥40,000

お問合せ・お申込みは三ノ宮駅旅行センター 221-0190・4500

talk and talk



＜神戸っ子愛読者サロン＞

年ぶりで神戸へ行くことを大変楽しみにしております。

「神戸っ子」が末長く続く日本一のタウン誌になるよう、また編集にたずさわっているみなさまのご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。草々。(1981年3月19日ポートピア'81開会式の日に)

★神戸っ子創刊20周年おめでとうございます。私が宝塚にまいりまして20年経ってしまいました。下の子供も20才になりました。

田辺聖子さんの「聖子の独白」絵も文も好きでした。新井満さんと石阪春生さんコンビの再びアルファベットアベニュー「Petite」美少年の美と運命的な神秘性が美しかったです。

★こんにちは、いつもお世話になっております。春公演に備え劇団員

△宝塚/丸本明子V

★神戸っ子編集部のみなさん、祝つてください。私はワカビカの神戸大学教育学部の一年生。広島に生まれ育ち、この春めでたくバ

ス(現役デスコ)し、4年間の私の「城」も御影に決まり、やっと生活に慣れた感じがです。「神戸っ子」の出会い、は、さんちか街の本屋さんで下宿探しに役立ち、と買いためたのですが、それには役立たず/否やカルチャー誌です。なかなか立派な本。女性週刊誌で購読していた神戸とのお付き合い、不慣れた神戸での下宿生活、親しい友と出逢ったときの興奮と同じです。

将来は小学校の先生になりたいと思っていますが、こんなタウン誌にたずさわってみたいとも思っています。……。「神戸っ子」を通りこすカルチャーを吸収してやろうと意欲満々、今後ともどうかよろしくお祈いします。編集部ってどんなふうなのかなあ?興味津々、近いうちに友だちとお訪ねします。△広島/宮川チエV

★前略、前に東灘区本山に住んでいました。2年前に「神戸っ子」を送っていました。今日テレビでポートピア'81の開会式を見て、淀川長治さんの話を聞いていたら、またたび「神戸っ子」が読みたくなりました。

この春、ポートピア'81を見に7